

江南知識人にとっての宋元交替

——徽州における地域の保全と社会秩序の構築——

于磊

はじめに

南北朝時代以来、中国本土の歴代王朝において、経済・文化の面で重要な役割を果たしてきた江南は、中国史の枠組みの中で重厚な研究の蓄積を有している。しかし、元代（あるいはモンゴル時代）の江南については、その研究の手薄さがつとに指摘されている。⁽¹⁾ こうした状況において、宋元交替期の知識人の動向は、比較的多くの考察が加えられてきたテーマである。これらの研究においては、知識人が新政権であり「異民族」王朝であったモンゴル政権に対してどのような態度をとったのか、という問題が議論されてきた。⁽²⁾ 近年では、こうしたモンゴル政権治下の知識人の表面上の選択に着目する研究を相対化し、地域史の視座から元代江南知識人と地域社会・中央政府との関係に迫る研究が行われている。⁽³⁾

言うまでもなく、宋元交替期における知識人の表向きの選択のみにとらわれないこれらの研究によって、モンゴルの支配を快く思わない江南の知識人といった先入観⁽⁴⁾は払拭されつつある。ただし、こうした研究はほぼ宋元交替

期という時点のみにとどまっております、元代中後期までを視野に入れていない。そして、元代中後期の知識人が、宋元交替期の知識人の様々な行動をどのように意識していたのかという問題は、今なお十分な検討が加えられていない。本稿では、こうした先行研究の偏差を埋めるべく、宋元交替期における徽州の在地知識人のモンゴル政権に対する対応とその記憶の継承を起点に議論を展開する。

モンゴルの江南征服後、徽州はモンゴル軍による屠城の危機に直面した（本稿では、この事件を「徽州屠城危機」と呼ぶ）。最終的に、この危機は徽州の在地知識人の尽力によって回避された。この宋元交替期の徽州に起こった事件については、すでに多くの研究者によって注目されてきた。⁽⁵⁾

ただし、これらの研究はこの危機の回避のみを議論しており、とくに宋元交替期における徽州の在地知識人の動向を指摘するにとどまっている。宋元交替期から元代中後期にかけて、この危機に対する知識人の認識がどのように変化したのか、また、この危機に対する記憶が知識人の間でどのように継承され、顕彰の対象となっていたのかといった問題も見逃すことができないだろう。本稿では、具体的な事例として、「徽州屠城危機」の解決に尽力した鄭安の廟の建立に注目する。この廟は在地の父老の政府への申請と認可を通じて建立に至っており、その際の経過を記す榜文・碑記が『濟美錄』⁽⁶⁾に残されている。これらの史料を詳細に分析することにより、建立の具体的な経緯を解明する。その上で、こうした祠廟建立とそこにおける祭祀という事業・活動を通じ、徽州の知識人が地域⁽⁷⁾への帰属意識を再構築していたことを明らかにする。⁽⁸⁾

第一節 宋元交替期における「徽州屠城危機」と在地知識人

至元十年（一二七三）、モンゴル軍は襄陽を陥落させ、翌年には南宋の制圧に本格的に取りかかった。至元十二年（一二七五）二月、史天沢の死後、かわってバヤンが統帥となり、南宋遠征軍を三路に分け、臨安を目指した。至元十三年（一二七六）正月、南宋政府は降伏し、また江南各地の抵抗勢力に対して、投降を呼びかけたが、その抵抗は各地で続いた。⁽⁹⁾

「徽州屠城危機」はこうした状況の中で発生した。南宋滅亡の翌月にあたる至元十三年二月、寧国万戸の張杲が軍を率いて徽州に迫ると、都統李銓は投降した。これにより、徽州の旧南宋官吏のほとんどは罷免され、新しい官吏が任命された。五月、行中書省は総管クトクタイ Qutuyai（忽都觶）を派遣し、李銓の副将李世達に対して揚州の瓜洲に駐屯するよう命じた。揚州がモンゴル軍に対して頑強に抵抗した重要な地点であったからである。しかし、李世達は途中でクトクタイを殺害し、さらに徽州に戻ってモンゴル政権が改めて任命した王同知などの官吏を殺害した。これに対して、六月、招討使李朮魯敬が李世達の軍と戦い、最終的に李世達らは敗退した。⁽¹⁰⁾モンゴル軍は、通例、投降勧告を受け入れずに激しく抵抗した城郭都市に対しては「屠城」する方針をとっていた。こうした「屠城」は、往々にして漢人将領によって阻止されたが、華北・江南において実行に至った事例も少なくない。「常州の役」⁽¹¹⁾はもちろん、広西の静江においても、「屠城」がおこなわれた。⁽¹²⁾李朮魯敬もこの方針に従い、徽州の休寧・歙両県城内の人々をすべて殺害するつもりであった。⁽¹³⁾

これに対して、当時徽州の知識人はどのように対応していたのだろうか。干文伝は、その状況を次のように記述する。

萬戸（李朮魯敬）は早速歙・休寧諸縣に對する「屠城」の命令を下した。それ故、歙人である丘龍友らは父老を引き連れて軍門に赴き、「……諸縣の人々の命を救つて、弔伐の仁義を廣めるようお願いします」と言った。萬戸はこの請願を聞き入れた。そして、（萬戸は）徽州の地勢は險しく、遠隔地であるので、その守備を本地の賢者に任せるべきであり、（彼らに）人々を慰撫させることを協議した。こうして制命を承けて、丘龍友を權知徽州事、もと紹興司戸であつた婺源人汪元龍をその補佐、歙人鄭安を權知歙縣事、もと常州教授であつた休寧人陳宜孫を知休寧縣事、君（程隆）及び趙象元をその補佐、汪元龍の弟汪元圭を權知婺源縣事、祁門人方貢孫を權知祁門縣事、程克柔をその補佐とした。⁽¹⁵⁾

これによれば、丘龍友は、地方の人々と相談し、父老を引き連れ、李朮魯敬のところに赴いて、徽州の歙・休寧などの諸県の保全を願ひ出た。その結果、李朮魯敬は、彼らの請願を受け入れ、歙・休寧などの諸県の人々は殺害を免れることができた。

この史料は、宋元交替期の徽州知識人の動向を最も詳細に描くものであり、すでに多くの先学によって注目されてきた。⁽¹⁶⁾ とりわけ章毅はこの史料に現れた知識人を元代の「新豪強」として捉え、上述した関連する知識人の神道碑・墓誌銘など伝記史料を博搜し、彼らとその後代の状況を追究している。⁽¹⁷⁾ ただし、その検討は、関連知識人の事跡・経歴のみを対象としている。筆者が行状・家乗などの関連史料と比較検討した結果、史料間における記述の相

違や、これら伝記が執筆された理由・背景などの情報を踏まえて考察すると、新たな知見を得ることができた。以下、この側面から「徽州屠城危機」の解決にかかわった知識人の動向を改めて考察する。

まず、干文伝が執筆した程隆の「墓表」⁽¹⁸⁾から分析する。この「墓表」は主に四つの部分から構成されている。第一に、上述した「徽州屠城危機」に直面した程隆の対応。第二に、程隆の南宋末期の活動。第三に、程隆の祖先の状況。第四に、程隆の子孫の状況。ここで注目しているのは、干文伝が程隆の経歴の中で、最初に彼の「徽州屠城危機」に関する対応を強調している点である。干文伝は、墓表の冒頭にそれを執筆した理由として、「(程隆は)かつて郷邑に功があった(嘗有功於郷邑)」という点を挙げている。また、彼はこの「墓表」の最後に「(程隆)の功績で大きなものを墓表の最初に記し、その官歴・家族関係を次に詳しく述べ、子孫および郷人に伝える」⁽¹⁹⁾と述べている。ここからも程隆の功績をとりわけ強調しようとする干文伝の意思が窺える。この点は、程隆の従弟の程榮秀が執筆した程隆の「行狀」において「徽州屠城危機」が強く意識されていないことと対照的である。

程榮秀が「徽州屠城危機」を強調しなかった理由の手掛かりとなるのは、次の方貢孫の例である。

(南宋が) 歸附した後、丙子(一二七六) 春三月、邑(祁門縣)の南に乾討虜が突入した。彼らが通り過ぎたところろは破壊され、それは城郭にも及び、民は命を守ることができなかった。……秋七月、隣邑の黟縣でも、暴力集團が亂を煽り、焼き討ちや殺戮そして略奪を行い、民に衝撃を與え震撼させた。それは祁門の砂溪にも蔓延した。⁽²¹⁾

本史料は、祁門県学の教諭黄応旂が撰した「竹溪方公貢孫宰郷邑記」の一節である。「乾討虜」とは、元代初期、

モンゴル軍が南宋を攻略するに当たり、江南各地の叛乱を鎮圧するために募った兵士であり、クビライ中期以降徐々に廃止された。⁽²³⁾この史料から分かるように、宋元交替期の動乱に乘じ、軍隊や盜賊が各地に出没して地域社会に大きな破壊をもたらした。また、本節の最初に述べたように、南宋政府は江南各地の抵抗勢力に対して、投降を呼びかけたが、その抵抗は各地で続いた。このように、宋元交替期の徽州地域では、地域社会の危機が幾度も生じており、「徽州屠城危機」は、当時の人々にとって、そのうちの一つに過ぎなかったと考えられる。すなわち、このような宋元交替期の動乱を経験した知識人にとって、必ずしも「徽州屠城危機」だけを強調する必要はなかったのである。

方貢孫は「徽州屠城危機」の解決にかかわり、それによって、祁門県尹を授けられた。それにもかかわらず、黄応旂は至元十七年（一二八〇）に撰写した「竹溪方公貢孫宰郷邑記」においてこの経緯に言及していない。それよりも、黄応旂は、方貢孫が伝統的知識人として民のために尽力する志を高く評価している。⁽²⁴⁾

このような傾向は、曹涇⁽²⁵⁾が執筆した陳宜孫の「行狀」にも見出すことができる。宋元交替期の陳宜孫の活動について、曹涇は以下のように述べる。

至元丙子（一二七六）、邑（休寧縣）の至る所でかゆの煮えるように盜賊が活動を始めた。公（陳宜孫）は己の力を盡くし、勇氣を奮い立たせ智を集め、互いを勵まして衆を保全し、王師の到着を待った。功を行省にたてまつり、遂に休寧縣の知事となった。⁽²⁶⁾

曹涇は陳宜孫の門生かつ同僚であった。陳宜孫が「徽州屠城危機」回避を契機として休寧知県を授けられた経緯に

ついで、彼と密接な関係を持っていた曹湮が知らなかったはずはない。それにもかかわらず、曹湮は、「行狀」でそのことについて一言も述べていない。おそらく、「徽州屠城危機」は、曹湮にとって、動乱の時代において盜賊がひき起こしたごく一般的な事情にすぎなかったのだろう。以上の事例以外でも、方回が撰した汪元圭の「墓誌銘」⁽²⁷⁾でもほぼ同様な傾向が窺える。また、程鉅夫撰「婺源山萬壽靈順五菩薩廟記」⁽²⁹⁾が汪元龍兄弟の宋元交替期における活動に言及する際にも、「徽州屠城危機」は触れられていない。

一方、宋元交替期の動乱を体験せず、元代中後期に活動した知識人が執筆した「徽州屠城危機」の解決にかかわった知識人の伝記史料では、ほぼすべてが、干文伝による記録と同様、「徽州屠城危機」を強調している。⁽³⁰⁾すなわち、宋元交替期を経て、元代中後期の知識人が、数多くの危機から「徽州屠城危機」を抽出・選択して、その代表的な事件と見なすようになっていくという変化が浮き彫りとなる。そして、「徽州屠城危機」を強調する動きは、その回避にかかわった鄭安の祠廟建立とその祭祀という形で明確に現れるようになる。

第二節 鄭令君廟の建立と徽州の知識人について

前節で述べたように、宋元交替期において、徽州の知識人は「徽州屠城危機」を回避するため、モンゴル政権との協力を選択して、地域社会の保全を実現した。ただし、元初の知識人は、これを宋元交替期の動乱の一環としてのみ捉え、特別な意義を与えていない。一方、元代中後期になると、知識人は、宋元交替期の動乱の中から「徽州屠城危機」を特に取り上げ、この事件が持つ影響力を強調し、さらに、「徽州屠城危機」に尽力した先達の行動を

顕彰するようになった。その最も具体的な事例が、至元六年（一三四〇）徽州路歙県における鄭令君廟の建立である。本節では、「建立鄭令君廟榜」及び「鄭令君廟碑」の分析を通して、鄭令君廟建立の経緯を明らかにする。

従来、宋代の祠廟に注目した地域社会史研究においては、祠廟の建立を記念して撰文・立石された碑記及び祠廟に発給された「牒」などの文書の碑刻が積極的に活用されてきた。これらの研究は、中央政府が地域社会の秩序維持・再編を行ったという視点から、中央政府が地域の知識人層を通して地域社会を統合していたことを強調する。³²⁾しかし、祠廟を建てた主体である知識人の自律的・主体的な活動が十分に留意されているとはいえない。とくに、南宋期から元代・明初期にかけて、地域社会の「公論」を体现するためになされた知識人の活動も見逃すことができない。³³⁾筆者は、地域社会の側から、彼ら地域の知識人の意図・目的をより深く検討する必要があると考える。

鄭令君廟は、至元年間（一三三四—一三四〇）に在地知識人による政府への申請によって建立された。ここでは、「徽州屠城危機」回避に尽力した在地知識人の一人であった鄭安が祀られた。この経緯を分析することにより、彼らの意図、その背景となる思想について考察する。

鄭令君廟建立の経緯は、「鄭令君廟碑」・「建立鄭令君廟榜」（『濟美錄』卷一）に記されている。「鄭令君廟碑」は、同廟の建立を記念して至正年間（一三四一—一三六七）に立石された創建碑で、程文の撰、危素の書、余闕の篆額に係る。「建立鄭令君廟榜」は、徽州路総管府が、至元六年（一三四〇）に下した榜文であり、鄭令君廟建立の申請から地方政府の認可に至る経緯が詳細に記されている。

まず、「建立鄭令君廟榜」の概要を確認しておこう。至元三年（一三三七）四月、歙県二十三都の王文宣は、鄭安

を祀るために、本都の憩棠庵における祠堂の建立、塑像の彫刻、「令君廟」の賜額などを請願した。歙県はこれを受けて徽州路総管府に上申し、総管府はこれを認めた。祠堂が建てられた後、政府主導のもとで鄭安の祭祀が行われたことも榜文から分かる。その後、至元五年（一三三九）十月には、同じく二十三都の住民であった汪道崇らが、鄭安の祠堂を憩棠庵から移し、庵の側に鄭令君廟を建てることを願ひ出た。江浙等処行中書省は、この申請を認め、筭付を徽州路総管府に下した。それを受けて徽州路総管府は、鄭令君廟建立を認めるに至った経緯を榜文としてまとめ、歙県に布告させた。

鄭令君廟は、もともと憩棠庵の中にあつた祠堂が、至元年間、憩棠庵の側に鄭令君廟として建て直されたものである。さらに、至正年間には、鄭安の墓の近くに移された。⁽³⁴⁾この移転について、程文「鄭令君廟碑」（『濟美錄』）卷一は、次のように述べる。

（父老らは）城西の憩棠庵に香火を設け、尊崇して「鄭令君」と呼ぶことになった。しばらくしてそれだけでは尊崇の意として十分ではないと考え、憩棠庵の側に廟を建てようとした。ちょうどその時、徽州路の長官は民（の行爲）を快く思わず、その申請は却下された。歙縣の人々は大いに騒ぎ、その事が行中書省に報告された。行中書省は鄭令君の功德が祭法に一致すると考え、縣に文書を下し、申請通り人々が廟を建てて折々に祭祀を執り行うことを許可した。民は非常に喜んだ。また歙縣の人々は憩棠庵の側の廟が表通りに面しており、騒々しかったため、神の居所ではないと考えた。これを移すことを占うと、吉と出たので、溪を越えて二里先に高くて廣い場所を選び、令君の墓の近くに新に祠廟を建てた、云々。⁽³⁵⁾

この記述から、鄭安の祠堂を憩棠庵から移動し、庵の側に令君廟を建てるという至元五年の汪道崇らによる申請は、徽州路総管府の長官が賛成せず、いったん却下されたことが分かる。しかし、それを不満とした当地の人々は大いに騒ぎ、そのことは江浙等処行中書省の知るところとなった。ここに及び、二十三都の人々の立廟の申請は、行中書省によって認められたのである。また、その鄭令君廟は喧噪な表通りに面していたため、その後、至正年間に鄭安の墓の近くに移転された。

ここで、まず留意すべきは、徽州路の地方政府がこの立廟の申請を拒否した点である。この徽州地方政府の立廟拒否については、宋代において朝廷が地域の立廟を通して地域社会を統合していたとする多くの先行研究では、十分に解釈できないと考えられる。このように考えてみると、王文宣・汪道崇が地域社会の父老の代表として鄭令君廟を建立しようとし、それを地方政府に請願している点は注意に値する。この動きは、その立廟が元代中後期の地域社会における知識人や父老にとって、どのような意味をもっていたかという問題に直結する。

王文宣は、至元三年四月の請願において、鄭令君の祠堂の立地について、「憩棠庵が面する表通りは、知識人と庶民両者が通行する所である⁽³⁶⁾」と述べている。彼は、その立地条件として、地元の人々を容易に集められる場所であることが重要であると考えていた。そして、多くの歙県の人々がそこに集い、以下のような祭祀が行われるようになった。

歙人は令君を祀るのに、決して粗略にあつかわない。つねに年の仲春の中旬に日を占い、犠牲を供えて酒を醸造し、廟の前に集まった。簠簋・籩豆（祭器の名）を並び、音楽を演奏して舞踏を行い、供え物を差し上げて

神を喜ばせる。儀禮が終わり、飲食に満足すると、祠廟を閉めて歸る。仲秋の日も同様である。⁽³⁷⁾

この史料から分かるように、在地知識人は、このような盛大な祭祀を通して、宋元交替期における地域社会の安定に尽力した鄭安に敬意を表していた。

宋代以来、各地の廟は、朝廷の許可を得て、建てられるのが通例であった。⁽³⁸⁾そして、これらの廟における祭祀は、地方官の主導のもと、地域社会の知識人によって行われていた。⁽³⁹⁾しかし、鄭令君廟の建立事業は、朝廷や地方官の意向ではなく、在地知識人の主体的な動きによって進められたものであり、彼らの働きかけは決して軽視できない。そして、こうした在地知識人の営為は、地域社会における知識人のネットワークを構築する機能も有していた。王文宣・汪道崇が鄭令君廟に関する上告を行ったのは、地域社会における父老の代表としての行動であり、その理念は知識人と共有されていたと言えよう。

王文宣・汪道崇らが祠廟建立を願い出る動きは、前節で述べた元代中後期の知識人による、「徽州屠城危機」の強調と合致する。元代中後期の徽州知識人は宋元交替期に地域社会の安定に尽力した知識人に対して、様々な方法を通して、その功績を再確認していたのである。鄭安の廟の建立と祭祀は、「徽州屠城危機」回避に対する記憶の強化の一環として捉えられる。

宋元交替期の知識人の功績を再確認する方法は、伝記史料の執筆や祭祀だけに止まらない。程隆の後代子孫によって建てられた「永思亭」のために、朱升が至正八年（一三四八）に撰写した「記」には次のような記述がある。

元初期に江南を攻めるにあたり、徽州で兵の亂があり、その民を屠ろうとした。程隆は危険を冒して説得を行っ

江南知識人にとっての宋元交替 于磊

第九十四卷 一六七

てこれを止め、本縣の縣尉を授けられた。……故に程氏の先人たちは晉における太守、梁における忠壯、唐における都使、宋における團練、國朝（元）における縣尉（程隆）のように、みな亂を安んじ民を活かすという功を繼承できたのである。⁽⁴¹⁾

晋代の永嘉の亂の際、程元譚が徽州地域を守り、また、梁代の程靈洗、唐代の程湮、宋代の程全がそれぞれ侯景の亂、黃巢の亂、金人の侵略に抵抗した。朱升は程隆が「徽州屠城危機」に尽力したことを、こうした祖先の功績と同様に、「亂を安んじ民を活かすという功」であると考えている。要するに、こうした功績は、程氏一族だけではなく、徽州全地域に及ぶものであった。

さらに、このように徽州地域に功績を持つ知識人を、金夢巖⁽⁴²⁾は「九賢」として称え、「九賢詠」という賛頌の詩を撰している。その賛頌の対象となったのは、干文伝が撰した程隆の「墓表」に現れた九人の徽州在地知識人である。「九賢詠」の序文には次のような記述がある。

至元丙子（一二七六）、李世達の亂のため、萬戸李朮魯敬は歙・休の諸邑を屠らんとする令を下した。歙の人丘龍友らは父老を率いて軍門に到り、「亂は百姓の意ではございません。百姓を守り活かして、慰問と討伐の仁を廣めんことを請います」と言った。萬戸はこれを許し、遂に制を承けて丘龍友を徽州の同知とし、婺源の人汪元龍に補佐させ、歙の人鄭安を歙縣の知縣とし、休寧の人陳宜孫を休寧の知縣とし、趙象元・程隆に補佐させ、汪元龍の弟汪元圭を婺源の知縣とし、祁門の人方貢孫を祁門の知縣とし、程克柔に補佐させた。諸公は郷邑に大變大きな恵みを施しており、そのためそれぞれ一詩を賦すのである。⁽⁴³⁾

この記述から、元代中後期の金夢巖が丘龍友・鄭安らを頌えたのは、彼らが「徽州屠城危機」の解決にかかわり、「郷邑に大変大きな恵みを施した（有恵于郷邦甚大）」ためであることが分かる。宋元交替期の知識人が「九賢」とみなされたことは、後代に大きな影響を及ぼした。明代弘治十五年（一五〇二）に編纂された『徽州府志』巻八には、汪元龍・汪元圭兄弟の事跡が記載されており、その記述は、方回が撰した汪元圭の「墓誌銘」の内容に基づいている。そして、『徽州府志』の編纂者汪舜民は「兄弟（汪元龍・汪元圭）は徽州路の九賢のうちの二人となった（兄弟爲徽州路九賢之二）」と追記している。

以上、本節の議論をまとめると以下ようになる。まず、元代中後期の徽州の在地知識人は、積極的に地方政府に上書し、宋元交替期における地域社会の保全に大きな役割を果たした鄭安の祠廟を建立するよう求めている。そして、程隆の例からもわかるように、彼らは「徽州屠城危機」回避に尽力した知識人に対して高い評価を与えている。さらに、「徽州屠城危機」回避に尽力した宋元交替期の知識人は、地域社会の「九賢」として位置づけられるようになったのである。要するに、元代中後期の徽州在地知識人は、宋元交替期における先達の事跡から「徽州屠城危機」を選択的に抽出することにより、地域社会の統合を積極的に試みていた。このように、モンゴル政権の統治が安定化した時代においても、在地知識人は地域社会で自らの理念を追求して活動していたのである。

第三節 元代江南における知識人の地域への帰属意識の構築

前節までにおいて、元代中後期の知識人が宋元交替期の一連の動乱事件から「徽州屠城危機」を選択的に抽出し

て強調し、また、それに尽力した知識人の功績をしばしば再確認していた状況を明らかにした。それでは、なぜ宋元交替期から元代中後期に移行する過程で、こうした変化が生じたのであろうか。本節で、この問題に焦点を絞って考察を加える。

はじめに、その背景として南宋時代の状況を確認しておく。代表的な事例として、三先生祠に対する徽州在地知識人の態度を取り上げる。この三先生祠は、周敦頤・程顥・程頤を祀る婺源県の祠である。朱熹は、「徽州婺源縣學三先生祠記」（朱熹『晦庵集』卷七九）で次のように述べている。

私（朱熹）は三先生の道が高くて立派であると思うが、この婺源は、彼らの故郷ではなく、居住地でもなく、官僚となって赴任した地でもない。また、國の祀典として俸祿がないのに祀るのならば、禮としては何に依據するのか、また義としては何に當たるのか。詳細に申し上げ、（撰寫するのは）遠慮したい。⁽⁴⁾

朱熹は、婺源が周敦頤・程顥・程頤三人のゆかりの地ではないことから「三先生祠記」の撰写を断ろうとした。しかし、婺源の知県周師清・処士李繪及び学官・弟子は再び書信で、朱熹の意見に対して、以下のように述べた。

思うに濂溪（周敦頤）先生の學問は、本性が天から受けたものであり、その誠實さが自身から發しており、以前の聖人の學統に連なっています。また、河南の二程（程顥・程頤）先生は、この（周濂溪先生の）學問を受け継ぎました。こうして、その（二先生の）學問は、遂に廣く天下まで及ぶようになりました。（これは）恩賞による勸奨や刑罰による威壓があったからではなく、天下の學生は、（三先生の學問に）なびき従って勵んでいます。十數年來、その（三先生の）出身地ではなく、その居住地でもなく、官僚となって赴任した地でもなく、

また（朝廷から）祭祀を指示する文書が下ったのでもないのに、いたるところの學校で競うように祠堂を造つて（三先生を祀つて）、その學問を尊奉する意志を示しています。⁽⁴⁵⁾

その主張をまとめると、婺源は、周敦頤・程顥・程頤「三先生」の故郷ではなく、居住地でもなく、官僚となつて赴任した地でもないが、彼らの學問は天下の學生に尊敬されており、従つて、婺源でも「三先生」を祀ることができるというものである。これを受け入れて、朱熹は「徽州婺源縣學三先生祠記」を撰写することになった。この例は、南宋時代において、その地域にゆかりがない先賢でも、地域社会の祭祀の対象とする動きがあつたことを示すものである。⁽⁴⁶⁾

しかしながら、元代になると、婺源の知識人は、本来その地にゆかりのない程顥・程頤を郷賢すなわち郷里の賢人とみなして婺源州の州学で祀っていた。胡炳文⁽⁴⁷⁾が撰した「郷賢祠記」〔雲峰文集〕卷二は、その由来を次のように記している。

歙縣・婺源縣はもともと朱子の故郷であり、朱子の祠廟はすでにあつた。（それなのに）州學の郷賢祠が再建され、二程を州學で祀るのは、なぜであろうか。孔子の祖先は宋人であり、孟子は魯公の公族であり、河南（二程）は實にわれらが新安黃墩の忠壯公（程靈洗）の子孫なのである。……祠廟は泰定甲子（一二三四）の年に建てられた。その提案を發した者は、州の學賓・さきの兩貢補生・京學諭程鼎新、責任者は提學官・太守史光祖、碑記の撰寫者は胡炳文、碑記の書寫者は王儀であり、皆徽州の人である。⁽⁴⁸⁾

彼は北宋の二程、程顥・程頤の系統をひく河南程氏の一族が徽州の程靈洗の子孫であつたと主張している。そし

て、それに基づいて、朱子と同じように二程を徽州の州学で祀るのは当然であると述べている。⁽⁴⁹⁾ ここで注目に値するのは、このような提案を行った人物や祠廟建立に関わった人々、碑文の撰者・書丹者がすべて徽州出身者であると強調されている点である。ここからは、婺源の知識人が自身の手で郷賢（あるいは郷賢と位置づけた人物）をその出身地域（出身と位置づけた地域）で祀ろうとする意識の強さをみることができ、この「郷賢祠記」の書丹を担当した王儀も、⁽⁵⁰⁾ 胡炳文が河南程氏一族と徽州程氏とのつながりを根拠に、徽州の州学で二程を祀ったことに対して、⁽⁵¹⁾ 高い評価を与えている。

以上のように、南宋時代には程顥・程頤は婺源にゆかりがない人物であると考えられていたにもかかわらず、元代徽州の知識人は、彼らを郷賢に位置づけて祠廟で祀っていた。ここから、徽州の知識人は、二程から朱熹に至る理学の系譜を婺源に関連づけて再編しようとしていたことが窺える。それと同時に、郷賢はその郷里で祀られるべきであると彼らが考えていたこともわかる。そして、このような郷賢の祠廟の建立・重修事業は、碑記の撰文・書丹・立石も含め、当該地域の知識人によって担われるべきものであった。この過程を通じて、在地知識人は、地域に根ざした彼らの知の系譜——時としてそれは擬似的・作為的に再構築されたものであった——を再確認し、それによって、彼らの連帯感を強化し、地域への帰属意識を構築していたのであった。

それでは、鄭令君廟の建立は、以上のような知識人の営為においてどのように位置づけることができるのであるうか。程文「鄭令君廟碑」〔『濟美錄』卷一〕には次のような記載がみえる。

論ずるに、漢代以來、ここに功德があつて絶えず祭祀されたのは、東漢の贈尙書令方儲であり、その廟は白羊

山村にある。その後三百餘年を経て、陳の開府儀同三司であつた程靈洗を祀るようになり、その廟は黃墩にある。またその百年餘の後、唐代の越國公汪華を祀るようになり、その廟は烏聊山にあり、最も廣く知られている。また四百年の後宋代の錢氏兄弟を祀るようになり、その廟は汝溪にある。また百五十餘年の後、鄭令君を祀るようになった。皆生前に功德があつて、亡くなつた後に祀られるようになったのは、偶然ではない。なんと盛んであることよ。漢の盛世に縣令となつた者のうち、卓茂は密州で、魯恭は河南中牟で、朱邑は安徽桐鄉で、といったように、祀られる者は少なくないが、皆本郷では祀られていない。⁽⁵²⁾

真応廟で祀られる東漢の方儲、世忠廟で祀られる南朝陳の程靈洗、忠烈廟で祀られる唐の汪華、英烈廟で祀られる宋の錢畧・錢譽などは、歴代の王朝から封号を受け、すでに神格化されていた。程文⁽⁵³⁾は、建てられたばかりの鄭令君廟をこれらの祠廟の徽州における歴史的文脈に位置づけている。その上で、卓茂・魯恭・朱邑などの祭祀と対照させる。これらの人物はみな、その出身地域では祀られていなかった。⁽⁵⁴⁾程文はこの状況を問題視し、郷賢をその出身地域で祀るべきであると主張している。以上から、郷賢をその出身地域で祀ることで、知識人の地域への帰属意識を再構築しようとする傾向が窺える。

こうした傾向は、南宋から元代にかけて、江南各地が自分の地域を代表する歴史的人物を捜し求めていた動きとも合致している。⁽⁵⁵⁾華北沢州の状況からは、知識人が積極的に地方の民間信仰をその地の理学の系譜に組み込もうとする動きを見いだすこともできる。⁽⁵⁶⁾さらに、慶元路（寧波）の例をみてみよう。王応麟「九先生祠堂記」（『四明文獻集』卷一）に次のような記述がある。

四明の郷先生は九人いる。宋代の慶暦年間に學校が建立されたばかりの頃、楊適・杜醇・王致・王說・樓鬱などは道德と文章とによって後世の模範になった。郷の學校で授業をしたり、郷里の塾で講義を行ったりした。

地方の禮教と文化が益々盛んになったのは、五先生の功績である。また淳熙年間の舒璘・沈煥・楊簡・袁燮などの諸公は「徳性」を尊び「放心」を求めるといふ理念に基づき、經典を解釋して自らそれを實行した。後世の學者が節操を守って教養を身に付け、徐々に聖賢の域に至ることができるのは、四先生の功績である。⁽⁵⁷⁾

宋代以来四明（寧波）においては、楊適・杜醇・王致・樓鬱・王說といふ「慶暦五先生」が祀られていた。さらに、南宋淳祐五年（一二四五）、知州である顔頤が明倫堂の右側に祠を立て楊簡・袁燮・舒璘・沈煥といふ「淳熙四先生」を祀るようになった。

そして、元代になると、王心麟撰の「記」ではしばしば「慶暦五先生」と「淳熙四先生」が併称され、四明の「九先生」とされている。最終的に、元貞二年（一二九六）に上記の九人を祀る「九先生祠」が立てられた。王心麟は、九先生祠の建立を「士大夫の氣風を改める契機」（「作新士習之機」）と位置づけているが、彼自身もこうした郷賢の序列を正すことにより、地域への帰属意識の再構築が促進されたと考えていたのである。⁽⁵⁸⁾

以上の分析から分かるように、南宋から元代にかけて、江南各地域における知識人が積極的に郷賢をその知の系譜に位置づけていく風潮が生じた。こうした風潮の下で、元代中後期の知識人は、宋元交替期における徽州の地域社会に尽力した知識人の功績を、当該地域の歴史上において再評価するようになった。そして同時に、それを通じて、元代江南の知識人は、地域への帰属意識を再構築していったのである。

おわりに

本稿の考察によって明らかになったことをまとめると次のようになる。宋元交替期に起きた「徽州屠城危機」に対して在地知識人は、自らの理念に基づいて主体的に行動していた。しかしながら、こうした行動に対して、この他の宋元交替期の動乱を体験した同時代の知識人が彼らのために撰した伝記史料ではこの事件を取り立てて強調しているわけではなかった。同時代の知識人の認識では、「徽州屠城危機」は宋元交替期の動乱の一つの事件に過ぎなかった。

元代中後期になると、徽州、さらには江南の知識人が、「徽州屠城危機」という事件を選択的に抽出し、その回避に尽力した在地知識人の行動を再評価するようになる。換言すれば、「徽州屠城危機」の持つ意義を意識的に拡大し、この事件の回避に尽力した知識人を、地域社会の保全・維持を全うした理想的な先賢として改めて位置づけたのである。そして、彼らは「九賢」と称されるようになる。地域社会統合の中核として、求心力を与えられたのであった。鄭令君廟建立は、こうした動きの中、在地知識人主導の下で推進された事業であった。

地域社会における当該地域出身の先賢に対する祭祀は、往々にしてその地域における知の系譜を確認する営為と連動していた。こうした事業を通じて、地域への帰属意識を再構築しようとしていたのである。さらに言えば、こうした地域への帰属意識の再構築は、元明交替期の動乱に直面した徽州知識人が積極的に地域社会の保全に尽力していたこと⁽⁵⁹⁾にもかかわるだろう。

なお、本稿では、在地の中下級の知識人の主体的な動向を解明することを中心に論じたため、モンゴル政権の知識人政策とそれが江南知識人に与えた影響については議論しなかった。当然ながら、江南知識人の動向を総体的に把握する上で、モンゴル政権と江南知識人の関係は避けて通ることのできない問題である。今後の課題としたい。

註

(1) 杉山正明「モンゴル時代史研究の現状と課題」(『宋元時代の基本問題』汲古書院、一九九六) 五〇六頁、同「日本における遼金元時代史研究」(『中国—社会と文化』二二、一九九七) 三四一頁。なお、元代江南社会史の研究史については、拙稿「元代江南社会研究の現状と展望——元代江南知識人を中心に——」(『九州大学東洋史論集』四〇、二〇一二) でまとめているので、以下では、本稿に深く関わる研究のみに言及する。

(2) 植松正「元代江南の地方官任用について」(『法制史研究』三八、一九八八、のち『元代江南政治社会史研究』汲古書院、一九九七所収)、蕭啓慶「宋元之際的遺民与武臣」(『歴史月刊』九九、一九九六、のち『元朝史新論』允晨文化実業股份有限公司、一九九九所収)、陳得芝「論宋元之際江南士人的思想和政治動向」(『南京大学學報』一九九七—二、一九九七、のち『蒙元史研究叢稿』人民出版社、二〇

〇五所収)。

(3) 森田憲司「碑記の撰述から見た宋元交替期の慶元における士大夫」(『奈良史學』一七、一九九九、のち『元代知識人と地域社会』汲古書院、二〇〇四所収)、近藤一成「黄震墓誌と王應麟墓道の語ること——宋元交代期の慶元士人社会——」(『史滴』三〇、二〇〇八)、櫻井智美「趙孟頫の活動とその背景」(『東洋史研究』五六—四、一九九八)、拙稿「『癸辛雜識』之賀詩風波——論方回の人品及其他」(『元史及民族与边疆研究集刊』二〇、二〇〇八)。また、明までを視野に入れた研究として、宋元時代において、鄉村の在地有力者・名望家が紛争処理などを通じて鄉村秩序が維持され、それが明初の老人制成立の基盤となったことを論証した中島榮章の成果も重要である。中島榮章「徽州の地域名望家と明代の老人制」(『東方學』九〇、一九九五、のち『明代鄉村の紛争と秩序』汲古書院、二〇〇二所収)を参照。

(4) 黄秀敏「元雜劇に見られる読書人の形象——七つの出世物語劇より見た——」(『集刊東洋学』四八、一九八二)、
幺書儀「元代文人心態」(文化芸術出版社、一九九三)。ただし、いまだにこのような先入観は根強く、近年の研究でもこうした観点からの議論がなされている。包偉民「略論元初四明儒士的遺民心態」(『中国史研究』二〇一一、二〇一一)を参照。

(5) 朱開宇「科举社会・地域秩序与宗族发展」(国立台湾大学文史叢刊、二〇〇四)、宮紀子「徽州文書新探——『新安忠烈廟紀實』より——」(『東方学報』京都七七、二〇〇五)、章毅「理学社会化与元代徽州宗族觀念的興起」(『中国社会歴史評論』九、二〇〇八)、「元明易代之際儒士的政治選択——趙汴・朱升・唐桂芳之比較」(『中国文化研究所報』五一、二〇一〇)。

(6) 『濟美錄』は、「徽州屠城危機」の回避にかかわった知識人である鄭安の子孫鄭燭によって、明代嘉靖十四年(一五三三)に編纂された文集であり、鄭安とその子孫の鄭千齡・鄭玉・鄭璉の墓誌銘・行状・任命文書を収録している。

(7) 「地域」という概念の曖昧さについては、すでに多くの研究者によって指摘されている(岡元司他編「相互性と日常空間——「地域」という起点から——」宋代史研究会

編『宋代人の認識——相互性と日常空間——』汲古書院、二〇〇一)。本稿における「地域」とは、在地知識人が日常的に活動していた範囲を想定する。具体的には県レベルを念頭に置いて用いている。これは、先賢の祭祀が多く県を中核に行われているからである。ただし、地域社会における知識人に対する「記」・「序」の撰写などの依頼は、県を越えて路・行省にまで拡がりをみせる場合もある。同時代の出身地域に対する帰属意識は重層的な拡がりをみせることにも留意したい。

(8) なお、宋元以降の在地知識人のあり方を規定する要素の一つに宗族がある。本稿では、郷村ではなく県レベルを念頭に置き、宗族の単位を越えた在地知識人の連帯感や帰属意識を考察するため、宗族の問題に深入りするのはあえて避けた。宗族の問題については別途議論することにした。

(9) 堤一昭「元朝江南行台の成立」(『東洋史研究』五四—四、一九九六)七三—八四頁。

(10) 『元史』卷一六二「高興傳」に「追宋嗣秀王與樸人閩、與樸據橋、陳水南、興率奇兵奪橋進戰、殺其觀察使李世達、斬首三千餘級」とある。

(11) 同時代史料では「常州屠城」という(劉敏中『平宋錄』

卷上)。至元十二年(一二七五)八月、モンゴル軍は常州で南宋軍の激しい抵抗に遭い、常州城内の人々を殺害した。

- (12) 『元史』卷一二八「阿里海牙傳」に「阿里海牙以靜江民易叛、非潭比、不重刑之、則廣西諸州不服、因悉坑之」とある。

- (13) 『濟美錄』卷一「建立鄭令君廟榜」。

- (14) 干文伝(一二七六—一三五三)は、平江路呉県(蘇州)の人である。延祐二年(一二二五)進士に合格して昌国州同知・長洲県尹・烏程県尹・婺源州知州などを歴任し、至正三年(一三四三)『宋史』の編纂に参加した。その後、集賢待制を授けられた(黄潜『金華黄先生文集』卷二十七「嘉議大夫禮部尙書致仕干公神道碑」)。

- (15) 萬戸急下令屠歙休諸縣。於是歙人丘龍友等率父老詣軍門言、……請全活之、以廣弔伐之仁。萬戸許之。且議、徽險遠、宜得其土之賢者分守、庶安集其民人。遂承制以龍友權知徽州事、前紹興司戸婺源人汪元龍佐之、歙人鄭安權知歙縣事、前常州教授休寧人陳宜孫知休寧縣事、君(程隆)及趙象元佐之、元龍弟元圭權知婺源縣事、祁門人方貢孫權知祁門縣事、程克柔佐之(『新安文獻志』卷八五、干文傳「進義副尉徽州路休寧縣尉程君隆墓表」)。

- (16) 前掲註(5)章毅、朱開宇の諸論文。

- (17) 前掲註(5)章毅論文(二〇〇八)一〇四—一〇七頁、同論文(二〇一〇)五五—五六頁。

- (18) 『新安文獻志』卷八五、干文傳「進義副尉徽州路休寧縣尉程君隆墓表」。

- (19) 著其功之大者於首、而詳其官行世次於下方、以詔其子孫及鄉人。

- (20) 程榮秀(一二六三—一三三三)は、徽州路休寧県の人である。若い頃方回到師事し、延祐中建康路明道書院山長を授けられた。その後、平江路学録・嘉興路学教授などを歴任した(『新安文獻志』卷七一、陳祖仁「元故江浙等處儒學提舉程公榮秀墓誌銘」)。

- (21) 歸附後、丙子春三月、邑南有乾討虜突入。所過殘破、逼及城郭、民不堪命。……秋七月、隣邑之黟、強梁煽亂、焚戮劫掠、撞搗震撼、蔓延於祁之砂溪(『新安文獻志』卷八五、黄應旂「竹溪方公貢孫宰郷邑記」)。

- (22) 黄応旂は、徽州路祁門県の人である。元初期に文学で推薦され、祁門県教諭を授けられた。その後、国子学諭に昇進した(『弘治徽州府志』卷六)。

- (23) 『元典章』卷三十四・兵部卷一・禁乾討虜軍人。また、陳得芝校注『元代奏議集録』(浙江古籍出版社、一九九八)上、一二〇頁も参照。

(24) 『新安文獻志』 卷八五、黃應旂「竹溪方公貢孫宰鄉邑記」に「有大抱負必有大設施、行將展所蘊以福天下蒼生。要非鄉邑所能私者」とある。

(25) 曹涇（一二三四—一三一五）は、徽州路歙県の人である。南宋咸淳四年（一二六八）進士に合格した。丞相馬廷鸞の家で教授し、馬端臨は彼に師事した。咸淳十年（一二七四）昌化県主簿を授けられた。宋朝が滅ばされた後、徽州紫陽書院山長を務めたことがある。その後、仕官しなかった（『新安文獻志』 卷九五上、洪焱祖「曹主簿傳」）。

(26) 至元丙子、閩邑草竊起如沸糜、公殫竭已力、激勇震智、勉相保聚、以埃王師之至。上功外省、遂知休寧縣事（『新安文獻志』 卷八五、曹涇「從仕郎揚州路通州判官弗齋先生陳公宜孫行狀」）。

(27) 方回（一二二七—一三〇七）は、徽州路歙県の人である。南宋景定三年（一二六二）進士に合格して、朝廷の内外を歴任した。モンゴル軍が南宋を攻めた時、建徳府の知府としてモンゴル政権に帰附し、建徳路の総管を授けられた。その後、仕官しなかった（『新安文獻志』 卷九五上、洪焱祖「方總管回傳」）。

(28) 『新安文獻志』 卷八五、方回「饒州路治中汪公元圭墓誌銘」。

(29) 程鉅夫『程雪樓文集』 卷十三「婺源山萬壽靈順五菩薩廟記」。

(30) 『新安文獻志』 卷七二、詹烜「東山趙先生汭行狀」。

『濟美錄』 卷一、揭傒斯「欽令鄭君墓道之碑」。

(31) 祠廟に発給された「牒」の多くには、主として王朝権力がある祠廟を公認する際に廟額や封号を下賜する内容が記されており、とくに宋・金代に盛んに刻石された。一方、「碑記」は、地方官や在地の知識人をはじめとした知識人層によって撰文され、祠廟建立の経緯や変遷、賜額・賜号の記録、神々の靈驗などが記されている（須江隆「作為された碑文——南宋末期に刻まれたとされる二つの祠廟の記録——」『史学研究』 一三六、二〇〇二）。

(32) 金井徳幸「南宋の祠廟と賜額について——釈文珣と劉克莊の視点——」（宋代史研究会編『宋代の知識人——思想・制度・地域社会——』汲古書院、一九九三）、須江隆「祠廟の記録が語る「地域」観」（宋代史研究会編『宋代人の認識——相互性と日常空間——』汲古書院、二〇〇二）、水越知「宋元時代の東嶽廟——地域社会の中核的信仰として——」（『史林』 八六・五、二〇〇三）。

(33) 伊藤正彦「元末一地方政治改革案——明初地方政治改革の先駆——」（『東洋史研究』 五六・一、一九九七、のち

『宋元鄉村社会史論』汲古書院、二〇一〇所収。なお、岸本美緒は宋・元・明初期における地域社会の変遷について、「宋と明初の間にある元という時代の独自性にも十分な考慮を払う必要がある」と指摘している（岸本美緒「書評／伊藤正彦著『宋元鄉村社会史論』」『歴史評論』七三四、二〇一一）。本稿は、岸本の指摘もふまえて、「徽州屠城危機」をとりあげ、元代の江南知識人が地域社会をいかに保全し、社会秩序の再構築を目指したのかという問題を考察し、それによって、宋―元・明の間の共通点、相違点を解明することも目的としている。

(34) 『弘治徽州府志』卷五には、「令君廟、在城西十五里憩棠庵、今遷於雙橋北」とある。双橋は鄭安一族が居住したところである。したがって、「鄭令君廟碑」が伝える「令君（鄭安）の墓の近く」とは、双橋の北に位置すると考えられる。

(35) （父老）共立香火於城西之憩棠庵、尊之曰鄭令君。久之以爲未稱崇禮之意、即庵旁立廟。會郡太守不悅於民、斥其請。民大譁、事上行中書。行中書按令君功德應祭法、且下縣、令聽民立廟以時致祭如請。民大悅。則又以庵旁廟臨大道、煩囂、非神所居。卜遷之、吉、乃踰溪二里、營高敞地、近令君之墓、更作安新廟云。

(36) 憩棠庵一所俯臨大道、實爲士庶往來之衝（『濟美錄』卷一「建立鄭令君廟榜」）。

(37) 飲人之祀令君也、不敢慢。恆以歲仲春中旬卜日刑牲醢酒、大會廟下。陳簋簠籩豆、張樂歌舞、薦以娛神。禮畢、醉飽神賜、闔戶而退。仲秋之日亦如之（『濟美錄』卷一、程文「鄭令君廟碑」）。

(38) 吳澄「臨川饒氏先祀記」（『吳文正公集』卷二五）に「近代非有賜不得立廟。先儒定家祭禮、遂易家廟之名爲祠堂」とある。

(39) 「建立鄭令君廟榜」（『濟美錄』卷一）に「仰依上立祠、祠成、委官致祭施行」とある。また、『濟美錄』卷一は徽州路総管府と徽州路万戸府の「祭文」も収めている。

(40) 朱升（一二九九―一三七〇）は、徽州路休寧県の人である。至正四年（一三四四）郷試に合格し、至正八年（一三四八）池州路学正を授けられた。朱元璋は徽州を攻めて彼に時務を尋ね、侍講学士を授けた。洪武元年（一三六八）翰林学士に昇進した。翌年、辞して故郷へ戻った（朱升『朱楓林集』卷九、朱同「學士朱升傳」）。

(41) 隆當國初下江南、徽有兵變、欲屠其民。隆冒白刃說止之、授本縣尉。……故程氏之先若太守之於晉、忠壯之於梁、都之於唐、團練之於宋、縣尉（程隆）之於國朝、皆克世其

靖亂活民之功、功之可則者也（朱升『朱楓林集』卷六「永思亭記」）。

(42) 金夢巖は、徽州路休寧県の人である。南宋の金安節の八世代の孫で、至順三年（玄黙涅槃之歳、一三三二）から同郷の理学家陳櫟に師事し、塾師を勤めた（『陳定宇先生文集』卷五「金伯明字説」）。

(43) 至元丙子、李世道之亂、萬戸李朮魯敬下令屠歙・休諸邑。歙人丘龍友等率父老詣軍門言、亂者非百姓意、請全活之、以廣弔伐之仁。萬戸許之、遂承制以龍友知徽州、婺源人汪元龍佐之。歙人鄭安知歙、休寧人陳宜孫知休寧、趙象元・程隆佐之。元龍弟元圭知婺源、祁門人方貢孫知祁門、程克柔佐之。蓋諸公有惠于鄉邦甚大、因各賦一詩（『新安文獻志』卷五七、金夢巖「九賢詠」）。

(44) 熹惟三先生之道則高矣、美矣、然此婺源者、非其郷也、非其寓也、非其所嘗遊宦之邦也。且國之祀典、未有秩焉而祀之、於禮何依、而於義何所當乎。則具以告且識不敢。

(45) 惟濂溪夫子之學、性諸天、誠諸己、而合乎前聖授受之統。又得河南二程先生以傳之。而其流遂及於天下。非有爵賞之勸、刑辟之威、而天下學士靡然郷之。十數年來、雖非其郷、非其寓、非其遊宦之國、又非有秩祀之文、而所在學官爭爲祠室、以致其尊奉之意（朱熹『晦庵集』卷七九「徽州婺源縣學三先生祠記」）。

州婺源縣學三先生祠記」）。

(46) 宋代の學校に設置される祭祀空間であつた「先賢祠」に祀られる対象について、山口智哉は「官界の成功者や郷里社会の名士、及び思想世界の著名人などである」と指摘した（山口智哉「宋代先賢祠考」『大阪市立大学東洋史論叢』一五、二〇〇六、一〇八頁）。

(47) 胡炳文（一二五〇—一三三三）は、徽州路婺源県の人で、『易經』に通じていることで世に知られ、明経書院の山長と蘭溪州の学正を歴任した（『元史』卷一八九「儒學傳」）。

(48) 歙婺源爲子朱子闕里、亦既有專祠矣。州學郷賢祠復、竝祀二程夫子者何。孔子之先宋人、孟子魯公族、河南實吾新安黃墩忠壯公後也。……祠成於泰定甲子。發其議者、州學賓・前兩貢補生・京學論草庭程公鼎新、主之者、提學官太守史奉議光祖、記之者胡炳文、書之者王儀、皆州人也。

(49) 山根直生は、徽州の程氏が積極的に河南程氏を同一の「宗族」であると主張したが、「二程・朱熹の遠祖の地」として黄墩の価値をさらに高めることになったと結論している（山根直生「宋元明の徽州における黄墩移住伝説」『九州大学東洋史論集』三六、二〇〇八）。

(50) 王儀は、徽州路婺源県の人で、延祐元年（一二三四）

の会試では及第できなかったが、皇帝の特恩によつて徽州州学の学正を授けられた（『弘治徽州府志』卷八）。

(51) 王儀「書胡雲峰二程夫子祠記後」（『新安文獻志』卷二四）は「此記遠引孔子殷人、孟子魯公族爲證本原的稱。草庭屢以爲屬、敬謝不敏。雲峰胡公能爲草庭奮筆發鬱、識者莫不稱快也。……此記傳三十六峰、遂與岱嶧爭高矣、草庭此舉誠不愧爲二程遠孫云」と述べる。

(52) 論自漢以來、有功徳於茲而血食不絶者、東漢贈尚書令方豎侯、廟在白羊山村。後三百餘年有陳儀同程忠壯公、廟在黃墩。又百餘年有唐越國汪公、廟在烏聊山、最顯。又四百餘年有宋錢氏兄弟、廟在汝溪。又百五十餘年、有鄭令君焉。是皆所謂生也有自來、逝也有所爲、而不爲偶然者。嗚呼、盛哉。漢之盛爲縣令、若卓茂之於密、魯恭之於中牟、朱邑之於桐鄉、得祀者蓋不少、而皆非其鄉土。

(53) 程文（一二八九—一三五九）は、徽州路婺源県の人で、『經世大典』の編纂に参与した。その後、休寧県黄竹嶺巡檢、懷孟路学教授、監察御史を経て、礼部員外郎で退官した（『新安文獻志』卷六六、汪幼鳳「程禮部文傳」）。

(54) 『漢書』卷八九「朱邑傳」、『後漢書』卷二五「卓茂傳」及び「魯恭傳」によると、朱邑・卓茂・魯恭は、それぞれ安徽廬江・河南南陽・陝西扶陵の出身であり、安徽桐郷の

喬夫・河南密県（新密）の県令・河南中牟の県令を務めたことがある。彼らは地域社会で民に尊敬され、それぞれは出身地ではない安徽桐郷・河南密県・河南中牟で祀られた。

(55) 梅村尚樹は、北宋から南宋にかけて、漢代の文翁がその出身地である廬州の舒城で祀られるようになった過程を追究した（梅村尚樹「宋代地方官学の興起とその象徴——文翁・常袞の顕彰を手がかりに——」『史学雑誌』一一八—六、二〇〇九）。また、陳雯怡も、婺州地域における知識人の理学の系譜を再構築したことにより、地域への帰属意識を形成していったことを明らかにした。すなわち、この婺州における理学の継承も地域性を強く帯びたものであった（陳雯怡「吾婺文獻之懿」——元代一個鄉里伝統的建構及其意義——」『新史学』二〇一一、二〇〇九）。

(56) 杜正貞「地方伝統的建構与文化転向——以宋金元時期的山西澤州爲中心——」（『歴史人類学学刊』四—一、二〇〇六、のち「村社伝統与明清郷紳——山西澤州郷土社会的制度変遷——」上海辞書出版社、二〇〇七所収）

(57) 四明郷先生有九人焉。宋慶曆建學之初、楊・杜・二王・樓公以道德文行師表後進。或授業郷校、或講道闕塾。衣冠文獻益盛以大、五先生之功也。淳熙之舒・沈・楊・袁諸公、以尊徳性求放心爲根本、闡釋經訓、躬行實踐。學者知操存

持養以入聖賢之域、四先生之功也。

(58) 鄭承良「作新士習之機——試論宋元之際四明士人風氣与九先生祀的設置——」(黄寬重主編『基調与変奏…七至二十世紀的中国』国立台湾政治大学歴史系等出版、二〇〇八) 二二二頁。

(59) 中島榮章は、元明交替期に徽州の「故老・耆儒」が朱元璋に対して民生の安定を進言した故事を引き、徽州の在地有力者が政権参与よりもむしろ元末の戦乱から郷里を守

ることを主眼としていたと述べる(前掲註(3) 中島論文)。また、展龍は、元明交替期の知識人が元末の動乱に直面した際、徽州で「義兵」・「郷兵」を組織し、モンゴル政権と協力して地域社会を保全したことを指摘している(展龍「元末士大夫組織「義兵」問題探析」『河南大学学报(社会科学版)』二〇一〇—三)。

(九州大学人文科学府歴史空間論博士後期課程)